SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

学生の政治意識に関する一調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 恭彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006790

資料

学生の政治意識に関する一調査

伊藤恭彦

一　はじめに

私が大学の教壇で政治学（政治学原論）の講義を始めて六年以上がたった。政治学原論なる科目が何を講義する科目なのかについての、共通の了解事項が政治学業界の中にあるわけではない。しかし、政治学の基本的な概念の理論的あるいは歴史的意味の解説を含む科目であることについてはおそらく異論がないであろう。そして、政治学の基本的な概念の中には「国家」とか「権力」とか「支配」とかいったものが入ることにもまた異論がないことであろう（もちろん、その概念をいかに解釈するかについては多様な議論が可能である）。私もそのような理解から、政治学原論ではこういった概念の説明を盛り込んできた。

私の講義での学生の理解度はかなり高く、期末試験等からもほとんどの学生が「知識」としては正確な理解をしていると考えられる。しかし、講義で例えば「支配」を語るとき、

「権力」を語るとき、私はときどき心配になってしまう。というのは、こういう概念が彼女ら／彼らの生の現実に関わるものとして理解されているのか、もう少し一般的に言うと、政治学が学生の政治意識や生活意識とにふれあっているのか、ということが少なからず疑問に思われる時があるからである。もちろん、このような疑問は私の政治学に対するある価値前提からくるものである。つまり、政治学は狭い知識ではなく、すぐれて実践に結びつく実践知であるべきという考えが前提になっている。政治学について別の価値前提をもっている者は、私の心配ごとは理解されないことだろう。もっとも、政治学が学生の意識とふれ合わない場合、そのことの多くの原因は、教師の側の力量不足からくることで、私の講義改善の努力が足りないことの結果とは思う。

キャンパスを見渡してみよう。急増する「茶髪」（ちゃぱつ）学生、アップビートに合わせて踊る学生、「お楽しみサークル」の氾濫、大学祭の非政治化等など―私はこれらの事態を「けしからん」と言うオヤジ趣味はもちあわせていないつもりだが―学生の姿は急速に変わり始めている。私が学生をやっていたのは、今から約一五年前で、当時は学生の非政治化や三無主義が叫ばれており、私も当時の旧世代からすれば、相当に異質なあるいは問題を含んだ学生であったに違いない。そんな私からも、学生の変貌が感じられるのである。

毎年、講義の最初に受講学生の意識についての簡単な調査を行ってきた。あくまでも講義づくりの参考にするためのものである。しかし、その中に現代学生の政治意識の一端が現れているように思われるので、以下、今年度分を簡単に整理してみた。なお、私の専門は政治学の中でも政治哲学と呼ばれる領域である。したがって、このようなアンケート調査や分析はド素人そのものであり、専門家から見れば非常に幼稚なものと笑われるだろう。また、調査項目等も当初このような形で発表することを意図していなかったため、必ずしも練られたものでなく、思いつき的なものもある。調査方法の幼稚さより、結果に現れたある種のリアリティに注目していただけたら幸いである。

なお、これよりはるかに大規模な学生の政治意識調査として以下のものがある。今回の調査においても参照させていただいた。小野耕二「政治意識からみた現代学生気質『名古屋

大学法学部生への意識調査』の結果から」（『季刊　窓』一九一九九四年所収）。

二　調査結果の概要

今回のアンケート調査は、今年度、私の政治学原論（静岡大学人文学部開講）の受講生一六二名（当日出席者）を対象に、九六年四月一二日の初回講義の最後約一五分間に実施した。受講学生の内訳は一二四人が人文学部法学科二年生、残りの三八人は人文学部の他学科の学生（学年は二年から四年まで）である（政治学原論は人文学部法学科の二年生を対象とした科目であり、必修ではないが、毎年法学科二年生の学生はほぼ全員が受講している）。所属学科と学年の違いが政治意識にもある違いをもたらすと考えられるが、数も少ないので学科と学年の違いは無視して、全体的な集計を行った。また、若干名の社会人編入学生が含まれているが、それも無視して、集計を行った。なお、アンケートは無記名で行った。

調査票の構成は、政治イメージに関する問い、日本政治に関する問い、生活等に関する基本的な問いの三つからなっている。調査票は本稿末に掲載しておいた。

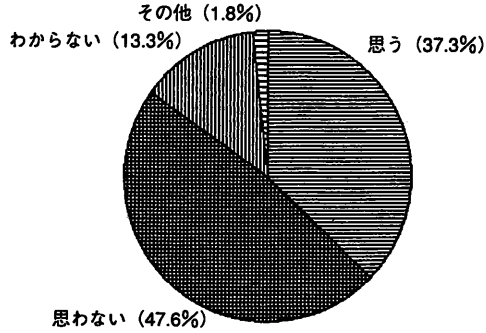
（一）学生の政治イメージ

・アンケート結果の概要

学生が政治というものをどんなふうにイメージしているのか、四つの問いで尋ねた。

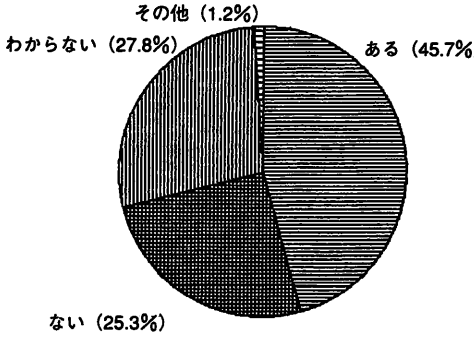
まず最初に「被支配感」を「あなたはシハイ（支配）されていると思いますか？」という形で尋ねた。政治的支配や国家権力による支配とあえて限定しなかったのは、漠然としたイメージをとらえてみたかったからである。その結果を図1に整理した。「支配されている」と思うものが三七・三％、「支配されているとは思わない」が四七・六％、「わからない」が一三・三％であった。

図1. 被支配感



次いで「権力の実感」を「あなたは権力の存在を実感したことがありますか?」という問いで尋ねた。その結果を整理したのが図2である。権力の存在を実感したことがあるものが四五・七%、ないものが二五・三%、わからないと答えたものが二七・八%であった。権力の存在を実感したものに、さらに実感した具体的経験を記述してもらった。学生の具体的な経験を簡単に分類することはできないが、あえて分類すると二つのパターンがある。一つはテレビや新聞報道を通じて知った事実から権力を実感したもの、もう一つは、生活の中での具体的な経験の中で実感したものである。いくつか具体的な記述を紹介しよう。

図2. 権力の実感



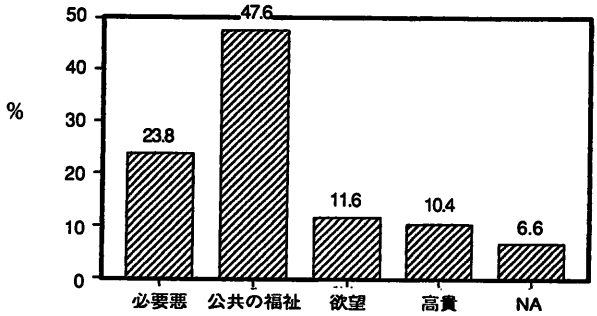
テレビ等マスコミを通じて感じた（と推測される）例

「天皇のテレビを見た時、あんまり働いてなさそうなのにいい幼稚園にいったりした（のを見た時）」（　）内は伊藤の挿入―以下同じ
「沖縄基地の不法さしおさえ」
「テレビとかみていて住専とかの与党の強引な政策」
「国相手の裁判でナゾの判決が出た時」
「政治家の汚職や天下り」
「犯罪者に等しい議員がいつも当選していること」
具体的な生活経験で実感した（と推測される）例
「文教費（大学授業料？）の値上げ等、たった一人では阻止できない」
「自衛隊もなくしたいが、たった一人ではどうしようもない」
「消費税を払うとき」
「国民年金の強制加入」
「国民年金の手帳に個人ナンバーが書いてあり、一生あなたにつきまとうものだと付け足してあった（説明がなされていた）こと」
「中・高の学校の態度」
「駐禁で警察に罰金をとられたとき」
「教師の体罰」
「（ある授業）の単位をおとされたとき」（具体的な講義名が記入してあったが、ここでは「ある授業」としておく）
「市役所や（大学の）学生係における許認可の提出のとき」
「サークルでの経験」（具体的のは言えないとのこと）
「父親が仕事をしている時の人間関係を見て感じる」
「大学当局との交渉の中で」
「年度末に意味もなく道路が掘られて迷惑きわまりないとき。うちの前の道路はガタガタだが直してくれない」

最後に四つの政治イメージを示し、自分の政治イメージと近いものを一つ選択してもらった。選択肢についても十分練られたものではなく、例えば、マルクス主義的な伝統的政治イメージ、すなわち、支配階級による被支配階級抑圧の手段というような政治イメージは選択肢にいれていない。選択肢作成にあたって、やや意識したのは最近の政治哲学上のリベラリズム―コミュニテアリアニズム論争である。もちろん、一つの選択肢が特定のリベラリズム政治哲学やコミュニ

テアリアニズム政治哲学に対応しているわけではない。選択肢の①「政治とは治安維持、国防、利害調整のための必要悪であり、ないにこしたことはない」は、どちらかと言うと伝統的自由主義、あるいはリバテアリアニズムを意識したものである。第二の選択肢の②「政治は公共の福祉実現のための必要な手段であり、積極的な意味をもっている」は、高校までの「政治・経済」や「現代社会」の教科書の政治定義と近いもの、あるいは現代福祉国家的、その意味でウェルフェアー・リベラリズムに比較的近いものである。第三の選択肢の③「政治は権力者の欲望を満たす世界であり、我々の生活とは関係ない」は、政治の公共性をほとんど認めない立場、あるいは週刊誌的政治イメージである。第四の選択肢の④「政治は本来、人間にとって高貴な営みであり、政治ぬきには人間は人間たりえない」は、ある種のコミュニテアリアニズムやシヴィック・ヒューマニズムを意識してつくったものである。もちろん、これらが現在の政治についてのイメージなのか、それとも理想的な政治についてのイメージなのかによって回答が異なってくることが予想されるので、総体として整理してしまうことはやや問題を含んでいる。そのような問題を含んでいることを前提に、選択肢ごとの割合を単純集計し整理してみた。①が二三・八％、②が四七・六％、③が一一・六％、④が一〇・四％であった（図3参照）。

図3. 政治イメージ



・若干の考察

まず「被支配感」であるが、率直な印象では、「支配されている」という感覚が高いと感じられた。前述のように政治的支配に限定して尋ねていないが故に、固定的な印象をもってしまうのは危険である。しかし、学生との日常的会話や、キャンパス内の学生の姿から形成された私の予断は、学生は生活上、時として悩んだり落ちこんだりはするが、そんな大きなトラブルもなく、豊かで楽しい大学生活を満喫しており、支配されているとか抑圧されているという感覚を得る機会は少ないというものであった。半数近くが「支配されているとは思わない」という回答をしており、その意味で私の予断が全面的に誤りであったわけではないかもしれない。この点は「権力の存在」についてもほぼ同様のことが言える。「支配されている」とか「抑圧されている」とかいった対権力という意識が、唯一ではないが政治認識の一つの出発点だとするなら、支配や権力というところから政治学教育を始める回路はまだ十分にあると思われる。

ただし、その意識がどういう経験から形成されているかについては注意をはらう必要があると思われる。キャンパス内は表面的には平穏である（少なくとも私の所属する大学ではそうだ）。かつての大学のように政治闘争が日常的に繰り広げられ、機動隊という国家暴力の導入という緊張感はほとんど存在しない。その意味で具体的に日常的に政治権力の存在をひしひしと感じることはない。学生の権力存在感の多くは、テレビやマスコミを通じた報道から得られたものである。その多くが健全な権力批判への端緒をもっているものと考えられる。他方、具体的な生活の中での権力実感はストレートな政治権力、あるいは実態的な暴力というものではない。交通警察の取締や国民年金の番号、あるいは大学教師の単位認定を通じて「権力」が実感されているのである。これらも広い意味での政治権力ではあるかもしれないが、やや雰囲気が違う。どのような言葉が適切かわからないが、あえて言えば「管理社会的権力」感とでもなるだろうか。高校までの「管理教育」をくぐってきた学生達が、管理を強く意識するのはある意味で当然かもしれない。また、ミッシェル・フーコーの権力論が若者に人気がある理由もこのあたりの事情と通じているのかもしれない。権力や支配を意識する学生が少なからず存在し、他方、政治を公共の福祉を実現する世

界と認識する学生も多い。権力世界としての政治というイメージと公共世界としての政治という二つの政治イメージを、現代に即して理論的、哲学的に整理するという課題が、この点でも急務のことと考えられる。

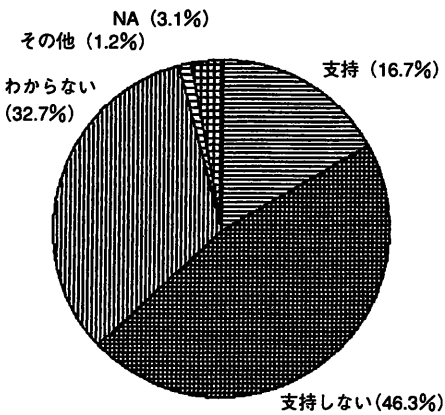
キャンパス内は確かに平穏である。しかし、例えば講義の内容、講義選択の機械的選別等について大きな不満が潜在していることも確かである。その点についてある学生は「不満だけども、あきらめている」と述べている。このことが管理されることに慣れた結果でないことを期待したい。いずれにせよ、従来の政治学の発想や方法を批判的に吟味し、現代学生の権力批判の内実と「管理」意識と政治学をどこかで架橋する努力は必要であろう（さらに言えば、学生を含む現代人全体の政治態度・意識の急速な変貌を視野に入れた政治学の革新は急務の課題である）。

（二）日本政治についての意識

・アンケート結果の概要

内閣支持、政党支持、現代の政治的争点についての意識、投票行動等を七つの項目で尋ねた。まず最初に橋本政権に対する支持を尋ねた。図4に示したように、「支持する」が一六・七％、「支持しない」が四六・三％、「わからない」が三二・七％であった。

図4.　橋本内閣支持率



次いで政党支持について尋ねた。最近の世論調査でもよく使われる「強い支持」と「弱い支持」の二段階で質問を構成した。選択肢は「強い支持」を尋ねる場合には、自由民主党、新進党、社会民主党、さきがけ、共産党、新社会党、その他、支持政党なしの八つである。「弱い支持」については、「強い支持」の中で、「支持政党はない」と答えたものに、「あえて一つ選ぶとどの政党を支持するか」という形で尋ねたもので、選択肢は自由民主党、新進党、社会民主党、さきがけ、共産党、新社会党、その他の七つである。

「強い支持」から見てみると、「支持政党なし」が全体の七七・九％で、次いで自民党が七・四％、新進党六・七％、さきがけと共産党がそれぞれ三・七％、その他が〇・六％、社会民主党は〇％という結果であった（図5参照）。「弱い支持」では自民党が二八・三％、新進党が二五・〇％、共産党が一八・三％、さきがけが一五・〇％、社会民主党が七・五％、新社会党が一・六％、その他が〇・八％という結果であった（図6参照）。

図6. 支持政党（弱い）

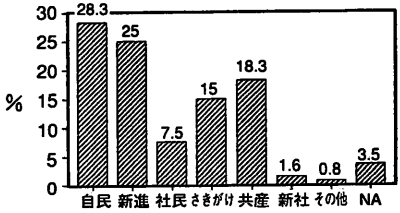
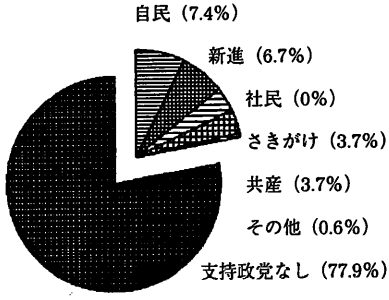
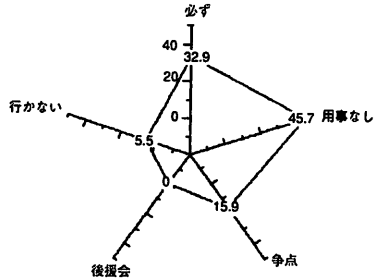


図5. 支持政党



次に投票行動、選挙への対応を尋ねた。選択肢は「選挙には必ず行く」、「他に用事がなければ行く」、「選挙争点によって決める」、「後援会活動等を手伝う」、「行かない」の四つである。また、大学二年生の中にはまだ選挙権を得ていない者もあるので、「まだ選挙権がない人は、選挙権を得たと仮定して答えて下さい」という注意事項を入れ、原則として全員が回答できるようにした（これも厳密に言えば、過去に投票をしたり棄権をした人と、まだ一度もチャンスがない人では意識の違いが問題になるが、この点も考慮の外においた）。その結果を整理したのが図7である。最も多かったのは「他に用事がなければ」

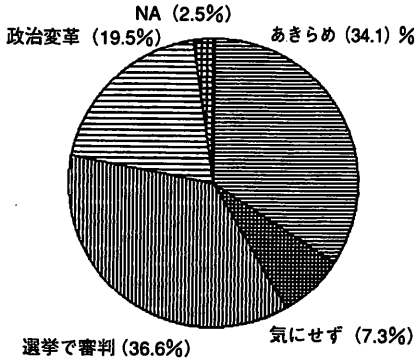
図7. 選挙行動



で四五・七％、次いで「必ず行く」の三二・九％、「争点によって決める」が一五・九％、「行かない」が五・五％、「後援会等を手伝う」は〇％であった。

次いで政治家の汚職問題についての考えを尋ねた。汚職に対して批判意識はあるがあきらめていると考えている場合を「あきらめている」、限りなく無批判的な場合を「気にしない」、「選挙で審判を与える」、さらに、投票以外の方法も考えている場合の四つの選択肢を設定した。結果は「選挙で審

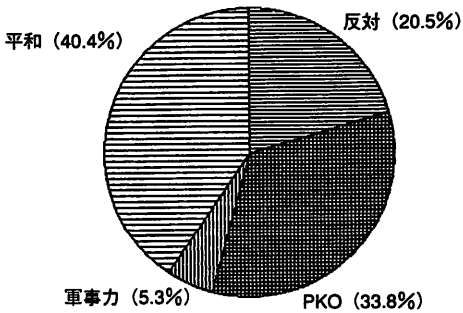
図8. 汚職に関する意識



判を与える」が三六・六%、「あきらめている」が三四・一%、「選挙以外の方法も使って政治を変えたい」が一九・五%、「気にしない」が七・三%であった（図8参照）。

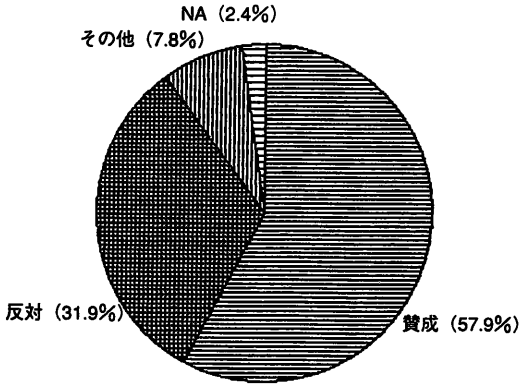
最後に現在問題になっている（あるいはなりつつある）政治争点についての考えを、憲法九条改正問題、オウム真理教への破壊活動防止法の適用の是非の二つを素材に尋ねた。まず憲法九条問題から見てみよう。アンケート作成にあたって、単純な護憲か改憲か以上の内容を聞くために、選択肢づくりにやや悩んだが、四つの選択肢を設定した。第一の選択肢①は、憲法九条改正絶対反対論である。第二の選択肢②は基本的に現在日本が行っているPKO派遣等の「国際貢献」を追認する形での改憲論である。第三の選択肢③は、軍事力をもつという、その意味で「国際貢献」論の枠を超えた改憲論である。第四の選択肢④は、現実の政治勢力の中で正面から議論されていない立場だが、非武装・平和主義を徹底する方向での改正を考える立場である。これ以外にも最近の新進党の小沢一郎が言ったような、憲法の枠内で多国籍軍への参加も可能というかなり強引な憲法解釈もある。この小沢路線に共鳴する者の選択肢はなく、あえて言えば①に入ってしまうかもしれない。しかし、その点も深く考慮していない。集計結果を見てみよう。図9に示したように、最も割合が高かったのは「非武装・平和主義の徹底による改憲」で四〇・四%、次いで「PKO・国際貢献の方向での改憲」で三三・八%、「九条改正には反対」が二〇・五%、「軍事力をもつ」が五・三%であった。

図9. 憲法改正



オウム真理教への破壊活動防止法適用問題では、図10に示したように、「賛成」が五七・九％、「反対」が三一・九％であった。

図10. 破防法適用



・若干の考察

内閣支持や政党支持については、静岡大学の学生を対象にした入手可能な過去の調査もなく、比較できるデータがないのでその特徴を示すことは難しい。そこで、やや乱暴だが、このアンケート調査と比較的近い時期に行われた世論調査との簡単な比較をしてみたい。比較対象としたのは朝日新聞社が九六年五月一二、一三日に実施した面接による世論調査である（その結果は、九六年五月一五日付朝刊に掲載されている）。朝日新聞のこの世論調査によると橋本内閣を「支持する」とした割合は四四％、逆に「支持しない」とした割合は三五％であった。学生の支持率が一六・七％であり、非支持率が四六・三％であるから、一般世論よりも支持率が極めて低いのが特徴的である。

政党支持も比較してみよう。朝日新聞でも「強い支持」と「弱い支持」の両方を尋ねている（ただし、尋ね方はちがっており、「弱い支持」を聞く際に「好き、きらいは別として、自民党、新進党、社会民主党、新党さきがけ、共産党のうち、どれか一つを選ぶとすれば、どれにしますか」としている。また支持するか否かではなく「好き」かどうかを尋ねて

いる点も、アンケート調査とは異なる）。単純な比較結果を表1に整理した。

	朝日新聞調査			学生アンケート		
	強い	弱い	合計	強い	弱い	合計
自民党	33	14	47	7.4	22.0	29.4
新進党	8	6	14	6.7	19.5	26.2
社会民主党	6	5	11	0.0	5.8	5.8
さきがけ	3	4	7	3.7	11.7	15.4
共産党	3	3	6	3.7	14.3	18.0
新社会党				0.0	1.2	1.2
その他	1	0	1		0.6	0.6
支持政党なし	41			77.9		

表 1．政党支持率の比較

注）学生アンケートの「弱い支持」は、朝日との比較のため母数全体に対する割合に計算し直している

調査方法、調査対象、調査時期等がそもそも違うが故に、一概に比較することはできない。それにしても、いくつか特徴的なことがある。まず、目につくのは、「支持政党なし」層が学生では八割近くに及ぶことである。学生の「政治離れ」が妥当するかどうかは議論がわかれるところだが、既存「政党離れ」は非常に顕著であることがわかる。各政党支持では、自民党に対する支持が学生の中では低いこと、逆に新進党支持が高いことに気づく。社会民主党では、朝日の調査のほぼ半分の支持しか得られていない。さきがけと共産党については、「強い支持」では朝日の調査と大差はないが、「弱い支持」では学生の間では、朝日調査の約三倍の支持を得ている。このあたりの理由はわからないが、少なくとも学生の（あるいは学生らしい）批判意識の現れと、業界団体や労組から自由である立場の反映であると推測される。また、共産党については、最近の共産党に対する「期待」の高まりを反映しているのかもしれない。学生の「保守化」がかなり以前から言われているが、今回のアンケートの政党支持の動向をみる限りでは、単純に保守化したとは言えそうもないのである。「改革」を掲げる政党（改革が新保守的改革であるかり

ベラルな改革であるか左翼的改革であるかは別にして）に対する評価は割に高く、逆に既存政党（共産党を除く）に対しては厳しい目でみていると言えよう。さらに、投票行動を見れば、学生が「政治離れ」を起こしているとは言い難いことも確認できる。「選挙に行かない」というものは五・五％とごく少数である。政治家の汚職に対する批判意識も高い。六割近くの学生が政治家の汚職に対して批判意識をもち、何らかの行動でその批判を表そうとしている。さらに、私には驚異的とも思えたが、実に二割の学生が「選挙以外の方法も使っていろいろな人と協力して政治を変えたい」と答えている。しかし、これは昨今の学生をみているとある意味でうなずけることである。自治会活動や二〇年前の学生がやっていたような政治運動は確かに学内では「衰退」している。他方、具体的な社会問題や社会の矛盾に対して問題を感じる場合に、わりにこだわりなく運動や組織に飛び込んで行く。薬害ＨＩＶ問題で注目を集めた若者たちや就職差別に反対する運動を繰り広げる女子学生たち、さまざまなボランティア活動へ積極的に参加する学生たち、あるいはＮＧＯ等で海外の問題に直接飛び込んでいく学生たち、こういうパワーが現在の学生の中にあることには特に注目しておきたい。

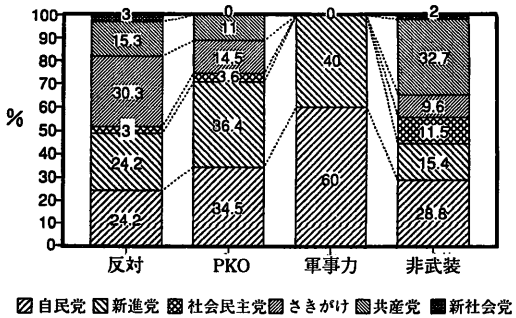
次に具体的な政治争点に関する意識を検討しておきたい。憲法九条問題では、まず目につくのは軍事力をもつという選択肢が学生の間にほとんど受け入れられていないことである。軍事大国になるということには明確な拒絶がある。これはおそらく現在の国民意識においてもそうである。争点は国民全体とほぼ同様、自衛隊を使ったＰＫＯ等の国際貢献をするのか、それともしないのか、ということである。ゼミ等での学生の最近の議論を聞いていても、「裸で国が守れるのか」という類の議論はほとんどでてこない。むしろいかにして国際貢献をするのかがまず争点になってくる。約三分の一の学生がＰＫＯ等の国際貢献が認められる方向に改正すべきであると答えている。ＰＫＯへの参加の是非を別の質問項目で尋ねていないが故に、ＰＫＯへの参加は認めるが、憲法改正には反対というような立場（わりと国民の中に広がっている立場）を捕捉できていない。この質問についても、ＰＫＯ参加の是非として答えたのか、憲法改正の是非として答えたのか、これだけでは判断しにくい。しかし、ＰＫＯ参加のために憲法を改正するべきという立場がかなり存在することに

は注目しておく必要があろう。

今回の調査では憲法九条改正反対かＰＫＯ許容型改憲かという軸だけでなく、あらゆる武力の放棄による平和主義の徹底という選択肢を設定した。先に述べた「九条の改正には反対だが自衛隊のＰＫＯ参加はやむ得ない」という非論理的態度とは異なる意識は存在するかどうか調べてみたかったからである。当初予想では、「非武装・平和主義の徹底という方向での改憲」はごく少数であり、ＰＫＯ許容型改憲か改正反対かが大きな対抗軸になると考えていた。結果をみてわかるように、非武装・平和主義の徹底の方向での改憲は実に四割にのぼる。このような立場は現在の日本ではあまり大きく叫ばれてはいない、ある種の理想主義である。マスコミや論壇では「現実」主義が幅をきかせ、理想や理念についてはほとんど省みられていない。そんな中、学生たちは、現状を肯定し「もっといい社会があるはず」ということもあまり正面きって言わない（または、言えない）。そうであるから、平和問題での理想主義の拡大はある意味で驚異的なことなのである。いずれにせよ、九条改正反対か否かという論点がＰＫＯ型国際貢献への賛成か非武装・平和主義に基づく国際貢献なのかという軸が、学生の間での一つの対抗軸になりつつあるのかもしれない。

さて憲法九条改正問題に関する学生の意識動向をもう少し明確するために、この問題と政党支持をクロス集計してみた。その結果が図11である（なお、ここでは単純化のために「強い支持」と「弱い支持」の違いを無視している）。

図11. 憲法問題と政党支持



気がついた点をいくつか指摘しておきたい。九条改正反対という意見をもつものでは、さきがけ支持が高いことが目につく。ＰＫＯ容認型の改憲という意見では、七割が保守政党支持（自民党と新進党）に結びつき、その中でも新進党支持が高いことがわかる。軍事力をもてるように改正すべきという意見（全体では少数派）では、自民党支持と新進党支持に分かれており、そのほかの政党を支持するものはいなかった。最後の非武装・平和主義の徹底という意識においては、特に目につくのは共産党と社会民主党の支持者が多いこと、逆に新進党支持者は少なくなっていることである。以上のことが各政党の憲法九条問題に関する思想と行動についての正しい認識に基づいた判断かどうかは意見が分かれよう。ただ、現在の日本が国際化で直面している課題、すなわち、いかなる対外構想をもつのか、に関してはＰＫＯ型を含む軍事力を国際政治の切り札としようとする構想、非武装・平和主義を徹底し、その延長線上で国際貢献を考えようとする構想の対立に大きな軸ができているように思われる（少なくともこの調査では）。そして前者が新進党の支持者と自民党支持の一部、後者が社会民主党、さきがけ、共産党支持者と親和的であることが認められよう。

（三）学生の大学生活に関するいくつかの項目

・アンケート結果の概要

最初に課外活動の状況を尋ねた。体育会系部活動が一三・五％、体育会系サークルが二二・四％、スポーツを中心にした交流サークルが一二・九％、文化系部活動が五・九％、文化系サークルが八・二％、文化活動を中心にしたサークルが三・五％、研究活動サークルが二・九％、その他が八・二％、無所属が二二・五％という結果であった。

次いで新聞や雑誌の購読状況をみてみよう。新聞を購読していない者は一七・六％であるのに対して、購読しているものが八二・四％であった。購読している新聞の内訳は図12に整理した。購読雑誌については、コンピュータ関係の雑誌、スポーツ関係の雑誌等趣味、実用系がほとんどである。次いで多いのは少年ジャンプなどのコミック誌であった。専門に関わる雑誌は『法学セミナー』が散見される程度であり、やや堅めの雑誌としては、『アエラ』が一件あっただけである。

図12. 購読新聞

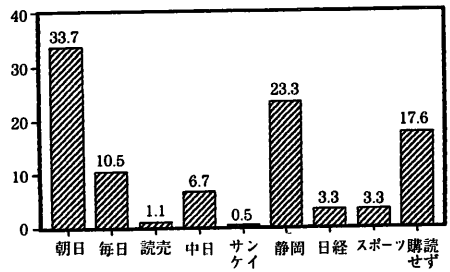
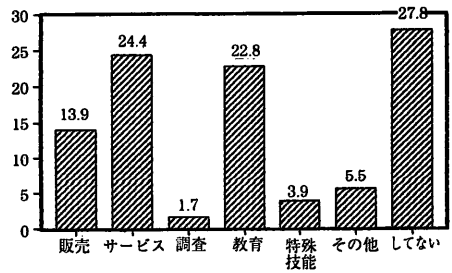


図13. アルバイト



アルバイトの状況は図13に整理した。アルバイトをしていないものは、全体の三割弱であり、約七割が何らかのアルバイトに従事している。中でも割合が多いのはサービズ関係と家庭教師等の教育関係である。

・若干の考察

大学生活の実態についてはこの調査ではほとんど何もわからない。ただ、最近言われる「部活動離れ」とお楽しみサークルへの人気、専門雑誌離れの傾向はおぼろげながら見えてくる（ただし、専門雑誌等堅い雑誌に関しては、「コミック

誌を含む」という但し書きに引きずられ、柔らかいものから回答したということも推測される。定期購読をしなくとも図書館等で総合雑誌などを読んでいる学生は結構いるようである）。また、アルバイトについても、ほぼ予想通りの結果であった。なお、静岡大学人文学部法・経済学科の学生の実態調査については静岡大学法経学会が定期的に行っている学生実態調査が参考になる。

三　まとめ

以上、ごく簡単に整理し若干のコメントをしてきたアンケート調査は、もとより静岡大学の学生の政治意識を代表しているとは言えない。限定的な意味しかこの数字はもっていないことは再度強調しておきたい。したがって、この数字を固定的に捉えたり、ここからある先入観をもって学生に接することは警戒しなくてはならないだろう。

とは言え、政治学教育にとってこの数字が全く無意味かというと、必ずしもそうは言えない。政治学教育の目標は多様に存在する。その中の一つに「健全な政治批判」能力の養成があることはおそらく異論がないであろう。しかし、批判の端緒や問題関心が生活実感の中に非常に素朴な形であれ何であれ、そもそも存在しなければ、この目標を達成することは困難である。政治的無関心とか保守化とか私生活埋没とか、現代の学生に対するさまざまな批判があり、その多くはあたっている。だが、同時に考えなければならないのは、彼女ら／彼らの批判意識の端緒が、もしかしたら、従来の政治学や旧世代の発想では予想もしなかったところにあるかもしれないことだ。従来の枠組みから、現代学生に「政治的無関心」というレッテルをはっているだけかもしれない。確かに一方では過度の「個人」主義化、自分の内面をカプセルにつつんだ上でカプセルの色と形で「個性」を表現しようとする傾向、他者尊重の弱体化等（キャンパス内のゴミの氾濫、老人に席をゆずらない学生等）、現代の学生について、率直に言ってその行動はかなり問題があると考えられる。そのような病理をも含め、次代を担う学生の意識に響く政治学のあり方を真剣に考えなければならないことだけは確かである。

今回は単発的な調査の概要のみを整理し、若干の考察をしたが、今後とも同じような調査を続け、現代学生の政治意識の動向に注意をはらっていくと同時に、新しい政治学の可能

性についても思索をめぐらしたいと思っている。

付記　嫌がらずにアンケートに協力してくれた学生諸君に感謝したい。また、アンケートデータの整理等で、私のゼミに所属する永山泰之君、平野晃裕君、水崎健夫君、森田敏文君に手伝ってもらった。記して感謝したい。

政治学原論開講時アンケート

講義づくりの参考と若者の政治意識の動向を調べるために、以下のアンケートに記入をして下さい。無記名ですので成績評価とは無関係ですし、全て数量的な処理をしますので、あなたの考えていることをできるだけ正確に書いて下さい。

一、「政治」というもののイメージについてお聞きします。

（一）あなたはシハイ（支配）されていると思いますか？

思う　思わない　わからない　その他

（二）あなたは権力の存在を実感したことがありますか？

ある　ない　わからない　その他

（三）上の（二）で「ある」と答えた人にお聞きします。権力の存在を実感したのはどういう経験ですか？具体的に記入して下さい。

（四）あなたの「政治」イメージに近い見解を下から一つ選んで下さい。

①政治とは治安維持、国防、利害調整のための必要悪であり、ないにこしたことはない

②政治は公共の福祉実現のための必要な手段であり、積極的な意味をもっている

③政治は権力者の欲望を満たす世界であり、我々の生活とは関係ない

④政治は本来、人間にとって高貴な営みであり、政治ぬき

には人間は人間たりえない

二、日本の政治についてお聞きします。

（一）あなたは橋本政権を支持しますか？

支持する　支持しない　わからない　その他

（二）あなたはどこの政党を支持していますか？

自由民主党　新進党　社会民主党　さきがけ　共産党

新社会党　その他（　　）　支持政党はない

（三）上の（二）で「支持政党はない」と答えた人に聞きます。もし、あえて一つ支持政党を選べと言われたどの政党を選びますか。

自由民主党　新進党　社会民主党　さきがけ　共産党

新社会党　その他（　　）

（四）あなたの選挙行動についてお聞きします。あなたは選挙に行きますか（まだ選挙権がない人は、選挙権を得たと仮定して答えて下さい）。

選挙には必ず行く　他に用事がなければ行く

選挙争点によって決める

後援会活動等を手伝う　行かない

（五）政治家の汚職がよく問題になります。あなたは政治家の汚職をについてどう考えますか。

あきらめている　気にしない　選挙の時に審判を与える

選挙以外の方法も使っていろいろな人と協力して政治を変えたい

（六）憲法9条についてお聞きします。あなたは下のどの考えに近いですか？

①憲法9条の改正には反対である。

②PKOなど国際貢献が認められる方向に改正すべきである

③経済大国にふさわしい軍事力をもてるように改正すべきである

④非武装・平和主義を徹底する方向で改正すべきである

（七）オウム真理教への破壊活動防止法の適用についてお聞きします。

適用に賛成である　適用には反対である　その他

三、あなた自身についてお聞きします。

（一）所属サークル・部活動の種類を下から一つ選んで下さい。

体育会系部活動　体育会系サークル　スポーツを中心にした交流サークル

文化系部活動　文化系サークル　文化活動を中心にした交流サークル

研究活動サークル　その他（　　）

（二）あなたが必ず購入して読む雑誌名（コミック誌を含む）を2つ以内書いて下さい。

（三）あなたが講読している新聞名を選んで下さい。

朝日　毎日　読売　中日　静岡　日経　サンケイ　スポーツ新聞

その他（　　）　新聞は講読していない

（四）あなたの現在行っているアルバイトの種類を下から選んで下さい。

販売　サービス　調査　教育　特殊技能　その他（　　）

アルバイトはしていない

四、最後に所属等基本情報をお尋ねします。

所属学科（　　）　学年　　年

出身地（　　）　性別：女・男

五、ご協力ありがとうございました。この講義に希望する事があれば自由に記入して下さい。